

言葉を信じて

小説家 阿刀田 高
あとうだ たかし

旅に出るとき、私はカメラを持参するけれど、実際に写真撮ることは少ない。日帰りの旅なら、二十四枚どりのフィルムを入れて行って半分も消費すれば多いほうだ。観光であれ取材であれ、目的地に着いたとき私は自分の感覚を信ずる。目で見たこと、耳で聞いたこと、心で感じたことを大切にします。

私の場合、ほしいのは言葉なのだ。

感じたものをどう言語で表現するか、そのために足を運んで来たのである。実際にはテープレコーダに口を近づけ、思いつくことをどんどん吹き込む。網羅的に自分の言葉を記録しておくわけである。

私は文筆家だから、見たこと、聞いたこと、感じたこと……表現するときはみんな言葉である。絵画や映像や音楽で表すわけではない。だったら初めて対象に触れて、いちばん鮮明な印象を持ったとき、それを、その場で言葉にしておいたほうが望ましい。創作の出口が言葉であるならば入口も言葉で捕らえておいたほうが断然よい。下手くそな写真を撮って、それをあとで眺めてみても、ほとんど意味をなさない。カメラは、あくまでも補助的な手段。たとえば、建物と風景の位置関係、書き留めるのが厄介な案内板の記述、造形的に口では表しにくいものの記録などに写真を用いるだけである。

こういう体験を通して私は日本語は本当にすばらしい、と信じている。たいていのことを言葉で捕らえることができる。それだけの豊富さとバライティーを備えている。私は日本語以外に、熟達している言語を持たないけれど……だから比較対照はむづかしいけれど、これだけ自由に、不足なく使うことができるのだから、

——日本語は絶対にすばらしい——

と、絶対評価ではなく、絶対評価として断言してよい、と考えている。

小説家になったばかりのころは戸惑いがあった。

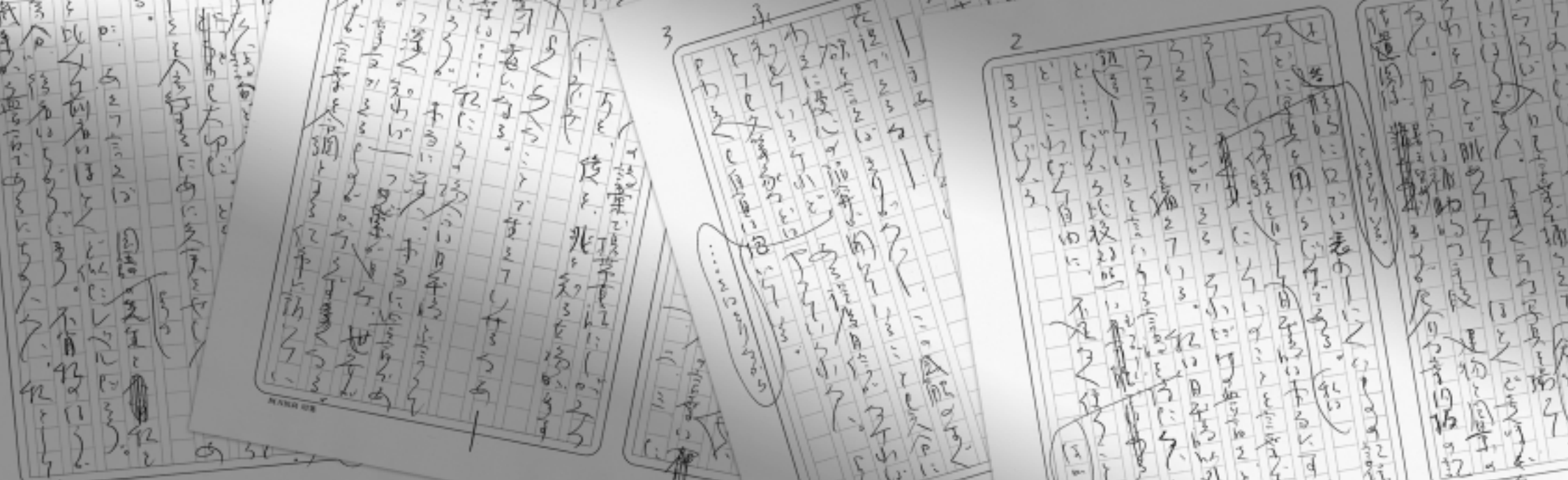
——こういう情景を表現したい。こういう性格を描きだしたい——

と、思っても言葉がついて来ない。適切な日本語が発見できない。おおよそのことは伝えられても、的確さ、明確さを欠いている。そんな不安が拭いきれなかった。

十年くらい仕事を続けるうちに、そう感ずることが少なくなった。二十年を過ぎて、

——まあ、たいていのことは、それなりに表現できるな——

欲を言えばきりがなし、この感触のすぐわきに慢心の陥穽が開いていることも充分に承知しているけれど……さはさりながら、ある程度自信がなければとても文筆家など



やっていたらいい。よくもわるくも自負は抱いている。
よく聞く話だが「一、二、三、たくさん」という数えか
たしか知らない民族がいるとか。それでも、生活は営んで
いけるだろうが、少し寂しい。

これと対比するわけではないけれど、昨今の若い人の言
葉遣いはまことに貧しい。あえて言えば「一、二、三、た
くさん」くらいの語彙で携帯電話にしがみついている。万
を、億を、兆を知る立場からすれば、

——よくあんなことで生きていけるなあ——
と、しみじみ気の毒になる。

言葉の世界は（私たちの場合は日本語と言ってよいだろ
うが）本当に深い。本当に豊富である。一つ深く知れば一
つ思索が進み、世界が広がる。私は自分が言葉を命綱とす
る仕事に就いていることを真実幸福だと思っている。さら
に奥へと進みたい。自分の能力と年齢を考えれば、これは
もう限界が近づいていると実感しながらも、

——もう少し、もう少し——

より豊富な、よりの確な言葉を掴みたいと願っている。
我流の用語で恐縮だが（正しい英語ではあるまいけれ
ど）私はリーディング・ボキャブラリーとライティング・
ボキャブラリーという区分をよく考えてしまう。前者は読
んでわかる語彙のことだ。後者は自分で書いて（話して、

も含む）使える語彙である。語彙というより、もう少し広
く語句と考えるほうが適切かもしれない。

二つとも大切だ。どちらも日本語のすばらしさを会得す
るために充実させたいものである。

が、あえて言えば、国語の先生と私とを比べて前者はほ
んど似たようなレベルだろう。多分、後者はちがうだろ
う。不肖私のほうが職業から後者は豊富であるにちがいな
い。私としては、この状況について、

「書くこともわりと楽しいですよ。」

日本語の豊富さを、さらに確かに感ずる手段として、こ
のひとことを叫びたい。大人が日本語の豊富さを実感して
いなければ、子どもたちがそこに興味を抱くはずがないで
はありませんか。

阿刀田高（あとうだたかし）

一九三五年東京生まれ。国立国会図書館職員を経て文筆家に。『来
訪者』で、第32回日本推理作家協会賞、短編集『ナポレオン狂』
『講談社』で第81回直木賞、『新トロイア物語』（講談社）で第29回
吉川英治文学賞をそれぞれ受賞。著作に『コーランを知っていま
すか』（新潮社）、『楽しい古事記』（角川書店）、『花あらし』（新潮
社）ほか多数。現在文化審議会国語分科会委員を務める。